

●畑には虫来て鳥来て蛙も来土といふは生きもの養ふ

布宮慈子

畑を始めたという。そんなことで多くの歌に野菜が登場する。野菜なので、カタカナが多く、また畑仕事は身体活動、言葉もリズムカルに運ばれる。前半では野菜とのやりとりが、後半では、土とのやりとりや、やや反省的にそれが詠われた。この歌は後半のもの。初めてのものもある。

初めてのものを植えれば毎日のやうに気になる小玉スイカよ

畑仕事のひとつの活動になっていて、その背景にはスタイルとして（の）不耕起栽培や自然農法がある（ことになる）。

つれあひの選びし農のスタイルは不耕起栽培また自然農法

ここから、一連のおわりの歌の「青々として」も出てくる。畑（一連タイトル）は、畑仕事である。青々が目に浮かぶ。「土といふ」もの、畑も。

草多き畑を眺めて人は言ふ お宅のはたけ青々として

●隣席の人のささやき耳打ちを聞き取れぬと知る四十路の慄き

梅津純子

これは問題の発端。四十路の慄き、とここでは整理した云い方になっている。あとの展開は、若き上司のその早口を聞き取れず（二首目）、同じ話を聞きたる人との受け止めに違い（三首目）、などときて、この歌。「話が違ふ」（五首目）も含めて、慄き、のその説明になっている。

否か応か肝心要語尾にあり人往々に語尾のむにやむにや

往々に、は往々にして。ポジティブな意味ではつかわれないう。否か応か、肝心要、慣用句が頻繁につかわれた。左耳難聴と判定される。後半は、補聴器の話。

行方不明の高額補聴器二冬後スキーウェアのポケットより出づ

その人に合わせて調整されるので、高額になると聞いたことがある補聴器。二冬後は、ふたふゆごと、と読んだ。この歌の「ポケットより」が一連タイトル。

眼鏡の蔓マスクの蔓との三重を避けて作りし耳穴補聴器

まだややマスク社会。じぶんも先に眼鏡を外してからマスクを外している。そうしないとマスクの蔓が眼鏡の蔓にからんでしまう。みな現実感のある歌の一連。

●帰省子は選択の余地なしと言う「ベジファーストでね」と並べる夕餉

大橋千佳子

これは、息子さんとのやりとりか（二首目に息子さん）。ベジファーストは野菜をさいしよに食べることを推奨する食事法で、健康にいいという。選択の余地なし、は出されたものを食べる立場

にあることから、あるいは夕餉そのものが野菜中心になっている、ということからか。面白い、親子の関係も出ている。

お盆前後のこと、が一連のタイトル。介護保障保険に加入したこと、樹木葬という選択肢、息子さんのやりとりに出されたのがこれら。以降は参加した(元)教え子たちの同級会のことか。それぞれ心配でたまらなかつた幾人、男子の声、彼の夢、君ら、中堅。

「えらいね」と「がんばったね」のほかは無し社会に生きる君ら逞し

さいごの歌は違って、こんな歌、

ヒヨドリよ残りの粒は分け合おうブルーベリーのネットを外す

ヒヨドリとこちら側とで分け合う、と読んだ。文明のこんな歌が浮かぶ。

朝々に霜にうたるる水芥子となりの兔と土屋とが食ふ(『山下水』)

### 前号作品短評B 〈慈子〉

● 不作為ということになりたる梅畑は落ち梅ひとつみることのなし

小野澤繁雄

やはり全国的に梅は不作為だったのだろうか。山形の近隣でも、梅がなくて梅干しがつくれないと聞いた。しかし、奇跡的にわが家では梅をたくさんもらってきて、友人知人に分けるほどだった。このように地域で梅が生る生らないなど、現実的な歌も実感としてわかって面白いものだ。

時間まだのこっているやカインズに砥石が減って買い換えており

カインズは規模の大きなホームセンターだそう。カインズという名は知っているが、近隣に店舗はない。時間はまだ残っているのだろうか、の「時間」とはカインズの営業時間のことか、はたまた自分の買い物の残り時間をいつているのか。どちらでもいいわけだが、暮らしぶりを映すように「砥石」がクラシックな味を出している。今どきのホームセンターは何でも置いてあり、生活感がある歌である。

● 中空のまんまるお月様眺めりて父よ母よと月見をしのぶ

河村郁子

作者にとって、月見は父母らの懐かしい思い出につながる符号なのだろう。「お月様」という言

い方が、子どものころの自分に返っている様子である。

疎開どき祖母さま月見て言ひたりき「月と親とはいつも良いなも」

戦争中のことを知る人も少なくなってきたが、確かに疎開はあったのだ。「なも」は、軽く感情を添えていう終助詞で「ね」くらいの意味。疎開先では厳しい生活だったはずだが、おばあさまのゆったりした会話は変わらず、助けられた思いだったのかもしれない。

思ひ出づ秀山荘に山靴を求めて仰ぎし駿河台の月

若者がみな山に登っていた時代があった。山用品といえは秀山荘というくらい有名な店だった。今はもうない。作者は駿河台の月を思い出し、エネルギーだった自分を振り返ったのだ。秀山荘を知っている世代としては、なんともいえず心地よい歌である。

●杉皆伐魍魎のごとく竹煮草

新野祐子

題名の「竹煮草」は、夏の季語。俳句季語便覧を調べてみると、「荒れ地や野山のどこにでも生える大型の草では裏も茎も白っぽい。花は茎の頂にこまかくつく。果実が風に音をたてるので、『ささやぐさ』ともいう」とある。山の杉をぜんぶ切ってしまったので、そのあたりは荒れ地となり竹煮草で覆われたのだ。「魍魎」は、山林・木石から生ずるといふ人面鬼身の怪物（広辞苑）というから、恐ろしい景色である。怒りをおぼえた作者は、たまらず次のような行動をとって、おの

れの心を鎮めるのだ。

乱心の吾をかなかなの中に置く

「荒野に希望の灯をともし」は、アフガニスタンとパキスタンで三十五年にわたって病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた、医師・中村哲さんの生き方を追ったドキュメンタリー映画である。作者たちが企画した自主上映会は大盛況だったようだ。

カンパ箱びつくり箱となり白秋

さわやかに笑み交わし合い帰るかな